Kagen Jouyo

下言上用

災害と紛争・国土学

国土学アナリスト 大石 久和 *Hisakazu Ohishi*

今年の夏は、まるで地球が狂ってきたのかというほどの異常気象を経験した。ヨーロッパは猛暑で苦しんだし、多くの台風が日本の南を東から西に走り、そのまま中国大陸に上陸することなど、過去に経験したことのない台風軌跡が生まれた。

厳しい条件下にある日本列島

また、一〇年ぶりの熊本地震もガス爆発という大きな災厄を伴って犠牲者を生んでしまった。

千葉で都市部豪雨災害を経験したと思えば、石川県、富山県、福井県などに途切れなく線状降水帯が出現して大変な生活障害をもたらしたし、印旛沼の氾濫という例のない被害も生まれてしまった。

気象の凶暴化は、地球の温暖化に伴う激しいエルニーニョ現象によるものだと解説され、CO_2排出量の増加とともに、今後さらに厳しくなるとの警告もなされている。

われわれが如何に制限された情報環境に置かれているか、オールドメディアは何を知らせようとしていないのかを、各国のCO_2排出状況で見てみたい。この状況をすでに知っていたという本誌の読者は何人いるのだろう。

2025年
二酸化炭素排出量
(Global Carbon Budget)

世界	386億トン (2020年から23%増)
中国	122.9億トン(31.8%)
アメリカ	49.0億トン(12.7%)
インド	31.9億トン(8.3%)
ロシア	17.8億トン(4.6%)
日本	9.6億トン(2.5%)

世界の二・五%しかCO_2を排出していない日本が、国民に再エネ賦課金という税をかけて、ほとんどが中国製であるパネルを、国立公園や奈良では古墳の周囲、阿蘇では山麓を埋め尽くすように敷き詰め、そこには上述したように豪雨災害の危険があるというのだから、何をしているのかというのである。現に千葉県の印旛沼ではパネルの太陽光発電がショートし、火災が発生した。

なすべきことが違うのではないかと思うのだが、それを考えるために日本の厳しい国土の状況を整理してみたい。

これは、筆者が「インフラとは何か、その執行形態である公共事業とは何か」を考え、公共事業・インフラ整備バッシングが続く中で訴える方法を模索していた時に、たどり着いたのが「国土から恵みを得る方法がインフラ整備なのだ」という考え方である。

するとインフラ整備の対象は国土であるから、「橋脚を支えていただいたり、トンネルで穴を抜かせていただいたりしている、わが国土とはどういうもので、その国土条件は他国とは如何に異なっているのか」を考える「国土学」にたどり着いたのだ。

最近、高市減税に対して「減税の財源はどこにある」と声高に叫ぶ国会議員やオールドメディアが目立つのだが、この主張自体がそもそも大きな誤りで、詳細には別稿が必要だけれども、簡単に言えば「経済のフローとストックの混同」なのだ。

もしどこかに何千億円なり何兆円かの減税財源がストックとして存在するのなら、それは「税の取りすぎ」であって、国民に返済しておかなければならないものである。従って減税財源とはストックではなく、経済を成長させることによって生まれるフローの税の増収なのである。

つまり、インフラ投資などによる経済の拡大が税の増収を生むのだが、それが減税財源となるのである。つまり、国土への投資(だけではないが)が減税財源をもたらすのである。

国土学については以前にこのコラムでも、国土の地形・地質・河川状況などの国土条件と、台風の常襲、頻発する豪雨、地震の常襲といった自然条件とに分けて紹介したことがある。最近の災害頻発状況を見ると、国土条件と自然条件が複合してわれわれに災厄をもたらしているとあらためて実感できる。なんとも厳しい自然をわれわれ日本人は引き当てたものだと、嘆きの一つも言いたくなるのだ。逆に言えば、やるべきことはいくらでもあるということなのだが、この国はそれをG7の中で「近年、もっともさぼってきた国」であり、だから投資のフロー効果が効かず、税収が伸びないできたのだ。

われわれの自然災害死史観

このような状況であるから、かつて紹介したことがあるように江戸時代末期の安政年間(一八五四〜一八五九)は、わずか五年程度だったというのに、内外の事件が勃発するとともに、日本の歴史全体を振り返っても、最大級と言えるほどの大災害が頻発したのだった。

この安政年間の災害史は、日本史全体を眺めても特級といえるほど厳しいものであった。通史で見ても、死者数の多さで順位付けしても、比較的近年の災害が上位にあることも驚きだ。日本史全体を振り返って、災害による死者行方不明者数の上位を年次とともに紹介する。

地震
(単位:人)

1	関東大震災
	1923年・105,000
2	明応地震
	1498年・41,000
3	鎌倉大地震
	1293年・23,000
4	東日本大震災
	2011年・22,081
5	明治三陸地震
	1896年・22,000

以下は省略するが、一万人以上の死者が生じた地震は、この他、宝永地震、島原大変肥後迷惑、八重山地震津波、元禄地震と続くのである。

風水害
(単位:人)

1	安政三年大風災
	1856年・100,000余
2	シーボルト台風
	1828年・10,000以上
3	寛保の洪水
	1742年・6,000
4	伊勢湾台風
	1959年・5,098
5	枕崎台風
	1945年・3,756

ここでも、地震と風水害による死者数を見てきたが、日本人の大量死はこうした災害によるものばかりだったと言っても言い過ぎではない。NHKが今年の大河ドラマで、およそ史実からかけ離れたデタラメ物語を展開しているが、この戦国時代でもどの程度の紛争死が生まれたかを研究する学者がいないように、「日本人は紛争では、多くは死んでいない」のである。

その代わりというのも変なのだが、われわれは災害で命を落としたのだ。これによって日本人だけが、世界の人々と際立って異なる思考形態を持つようになり、つまり日本独特の暫定主義、情緒主義、論理思考否定を生んできたのである。この論考の詳細は別稿としたい。